



ウナネ神の社やしろ

渡

良瀬貯水池周辺をぶらぶらと散歩していたら、お昼近くになった。この後は、ここから五キロほど離れた群馬県の板倉町宇奈根の諏訪神社へ向かうつもりだ。ここは宇奈根神社とも呼ばれ、往古の謎の神を祀っていた可能性が指摘されている。しかし、その前に腹ごしらえをしたい。おあつらえむきに貯水池から近い東武日光線の柳生駅前に、ちょうどよい店があった。中に入ると天井も高くて落ち着いた雰囲気だ。この辺りは川魚料理が名物なので、鯉こくとあらいを食い、どじょうを食い、鯰のてんぷらと小魚煮を酒で流し、うな重まで平らげたら歩くのが面倒になった。

このまま電車に乗って帰りたくなかったが、「神社に行かねば取材ができないんだろ？」と同行者から珍しくまっとうな意見をいただいていた。柳生駅まで戻ってくるのに往復で七キロ以上になるが、重い腹を抱えながら諏訪神社をめざして出発することにした。

店をでて、住宅地を抜け、川を越えると農閑期の荒涼とした畑が広がっていた。「国広く、地もはろかにして、土潤う」。私の大好きな乾いた土の景色を楽しみながら歩いていると、周囲の畑よりも少し高い場所に小さな社があった。どうやら目的の諏訪神社

のようだ。

かつて、ここに祀られていたとされる神は、ウナネ神といい「宇那根」または「宇奈根」などとあてられる。旧仙台藩では領内のこの神について「何の時代、何人が何神を勧進せるかを知らず」と記録しており、すでに来歴不明となっていた。

分布は圧倒的に東北地方に多く、特に岩手県南部、宮城県北部に集中していたと考えられている。その他は、三重県名張市に鎮座する宇流富志禰神社がこれに推定され、東京都世田谷区と神奈川県高津区に「宇奈根」という地名が残る。そしてここ板倉町宇奈根の諏訪神社も、かつてはウナネ社であったが、中世以降の諏訪信仰の高揚とともに、取って代わられたのではないかという説がある。

ウナネ社の多くは田の中にあり、しかも湧水や用水の取水口近くに祀られていた例があることから、水の神だったとするのがほぼ定説となっている。「ウナネ」という神名についても、古語では用水溝を「ウナデ」と読ませていることから、溝の根である取水口を意味するという。

一方、洪水除けの神という説もある。この板倉町でも、明徳二（一三九一）年の史料に「うなね郷たての村に：あら田貳町：」とあることから、「あら

田」を「新田」として新田開発のための用水の神とする説と、水害で荒れた「荒田」だとして水害除けの神だったとする説があり判然としない。

諏訪神社以外の神社も数回土盛りした水塚の上に建てられていたことから、ここが水害の常襲地帯だったことは想像できる。しかし、実際にこの神社がウナネ社であったのか、ならば何を目的に勧進されたのかを知る術は、絶えて久しい。



板倉町宇奈根の諏訪神社

[交通] 東武日光線柳生駅から徒歩約50分

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi